

## 沖繩の御嶽と年中行事に関する一考察

——南城市玉城を中心に——

ヒュウエンドリン・ファン・デル・フォルスト

沖繩では、御嶽として知られている聖地が全島に分布し原則として各集落に隣接し、共同体の宗教的な拠所として伝わってきた。住民に繁栄と守護を与えると信じられ、定期的に崇拜の対象となっている。そのため聖なる空間を体現して神事を行う役目が昔から女性によって果たされたのが沖繩の宗教文化の特色の一つでもある。しかし、社会的な発達と近代化に伴った合理化をその原因の一つとして、こういう伝統的な様相が特に沖繩本島南部では崩れてきた。現地調査を行った南城市玉城の字を成す垣花・仲村渠・百名・奥武にもこういう傾向が見られる。特に前者の三つの字の場合には戦後から女性神職が急速に消滅し、現在はすでにいない状態となっている。奥武では集落の年中行事に参与する神女はまだいるが、その人数が昔に比べて減少してきた上に彼女たちの跡継ぎの保証も不確実なようである。それにもかかわらず、重要視されてきた行事が未だ区長や参加する区民によって成し遂げられている。ところが、昔から祭祀を行い続け、その詳細を理解していたはずの女性神職の消滅と祭祀の簡略化という現実の中で年中行事の本来の姿と機能に関して不明な点が多くなっている。けれども、琉球王府によって編纂された史料や他の地域の年中祭祀の比較をもとにして今では分かりにくい行事本来の意味を昔の祭祀の方法と共同体内のその機能に照らして明らかにすることは可能である。

伝統的な社会は、科学技術的な手段が未熟であったために、

呪術や他の非合理的な処置にも頼っていた。共同体は、生活空間の中に現れた自然現象に宿る神秘的な力を信じながら、その環境と調和して生きていた。生存のために不可欠な作物の豊作や海産物の豊漁などを、守護を与えてくれる靈力に求めていた。つまり、以前の共同体の生活は主に農業と漁業に基づき、季節の移り変わりや自然現象による影響を受けやすい社会でもあった。共同体の生活が農作物の成功や季節的に訪れる魚の群れの恵みに根深く絡まっていたのだ。

琉球の史料から同じ様相を推察することができる。村落社会の中では生業の成功が神事と結び付けられていた。生活や社会、或は農業の各段階が祭祀を伴い、女性祭司が定期的に豊穰祈願を行っていた。また、農作物の完熟する期間をもとに生活した農耕社会が特に周期的な様相を表している。つまり、現在でも成し遂げられている年中行事が元々農耕儀礼の一部であり、玉城の幾つかの集落で今も行われているアミシの御願にもそうした意味がある。毎年旧暦六月二五日に行われるアミシの御願と共に綱引きが開催されている。『琉球国由来記』の中にアミシの御願は収穫後の行事であり、次の農作サイクルの始まりにあたって豊作の予祝祭祀が行われたとある。同様に綱引きにも豊作を占う意味が付けられている。旧来の農業が基礎となった社会は、作物の成熟する循環を一年の時間単位と捉え、一年の始まりとされた収穫後の新農耕サイクルの前後が、共同体の時間感覚で新年でもあった。また、共同体生活も新たに始まるのが儀礼的に表象された。創世神話の再現により、世界が起源した上代の理想的な状態を取り戻した社会への儀礼的な回

復が上演される。沖縄の創世神話の中では、降臨したアマミキヨが始めて御嶽を作った海の方のニライ・カナイから穀物の種をもたらした。やはり沖縄の各地でも収穫後の神事の中で多く海から豊穡を与える来訪神が迎えられる。そして、アミシの御願の時にニライ・カナイの遥拝所も参拝するので、この行事の背景には新年に向かつてニライ・カナイから豊穡を招き、共同体の御嶽と拝所に一年間の守護を祈願する本来の意味を込めているのではないか。つまり現行の年中行事の中にも、沖縄の伝統的な宗教世界観が潜在しているのである。

#### 仏教とカウンセリングの接点

友久 久雄

仏教とカウンセリングの接点といえば、まずその目的が、人々の心の悩みを解決することにある。人間が他の動物と異なるところは、悩みを持つということであり、その悩みを如何に解決するかが、人間としての成長が如何なるものであるかを決定するといっても過言ではない。そしてその悩みは大きく分けて二種類ある。

一つは、生老病死など人間が生物として生を受けたことに由来する、逃れることのできない悩みである。別の表現をすれば、人間として生来性に全ての人が持つ人類共通の悩みである。また、これらの悩みは、人間の知恵や能力では決して解決できない悩みである。それ故、私たちはこれらの悩みを解決するためには、人間の能力を超えた智慧に頼るしかない。私たちはこの能力を仏の智慧といい、この智慧の理を解く教えを仏教という。

これに対してもう一つの悩みは、日常生活を営むうえで後天的に生じる悩みである。別の表現をすれば、よりよく生きようとか、より幸福になろうとする要求が満たされないことに対する悩みである。そしてこの悩みの内容は全ての人に共通するものではなく一人一人異なるものであるため、その原因を明らかにし、悩む人の考え方や生活態度を変えることにより解決できるのである。現在では、これに対する解決方法は臨床心理学すなわちカウンセリングによる場合が多い。

そこで本稿では、親鸞を開祖とする浄土真宗を仏教として、ロジャースの開発した非指示的療法をカウンセリングとしてこれらの接点および差異について検討してみたい。

まず仏教について云えば、生老病死は全ての人が持つ避けて通ることのできない悩みであり、人間を越えたものとの関係性により解決しようとするものである。すなわち自己の死の問題を解決するとともに、生きていく目的や意義を明らかにするのである。これは浄土真宗における信心獲得であり阿弥陀仏との出会いである。またこの出会いは、歎異抄(十六条)に「一向専修のひとにおいては回心ということ、ただひとたびあるべし」とあるように、一生にただ一度のできごととされる。

これに対してカウンセリングにおける悩みは、この世で生活することにより生じる種々の悩みであり、その内容はある者にとつては悩みであるが、他の者にとつては悩みとならない。またこの悩みは、多くの場合人と人との関係により生じるものであり、その悩みも人(クライエント)と人(カウンセラー)との関係を通して解決できる。しかし、この悩みは一度解決され